

安田二郎氏の六朝政治史研究に寄せて

都 築 晶 子

安田二郎氏が逝去された。私が始めて名古屋大学東洋史

研究室の門をくぐった時から、安田さんと呼んでいたの、ここからは「安田さん」と表記させていただく。安田さんは当時すでに大学院の博士課程に在学していたが、いつ研究室を訪れても「主」のように同じ席にどっしりと坐っていた。論文の構想が行き詰まると、後輩を招集して黒板に図を描きながら「ここがどうしても判らん」と問いかけた。私に判るはずもなく、ただこんな風論文を書くのだと感心しながら傾聴していたこともあった。あれから半世紀ほどが過ぎたが、安田さんの語り口はずっと変わらなかつたような気がする。

安田さんは一九七八年に東北大学に赴任されたが、その二年後に私は沖縄の琉球大学に転任した。沖縄からは学会や研究会などに参加するのは容易ではなく、まして仙台は遙かに

遠く、安田さんと話す機会は余りなかつたように思う。

安田さんは一九八四年に京都大学人文科学研究所に内地留学しているが、その翌年、私もまた内地留学することになり、同じく人文科学研究所で吉川忠夫先生が主宰する共同研究班「六朝道教の研究」に参加する機会を得た。安田さんは実家のある名古屋から通えなどとあれこれ心配してくれたが、これはどうもご自身が京都暮らしの間にしみじみと感じていた仙台のご家族への思いの表白だったようである。それほどかく、内地留学をきっかけに私は道教史の研究に踏みだし、ほぼ同時に、これは別の事情から琉球史研究にも着手することになった。東晋に始まる新しい道教の担い手は、貴族制社会にあつて身分の低い士と庶の境界に位置する人々であり、地域も長江下流域が中心となる。このため、安田さん

の研究とは直接重なり合うことはなかったが、いただいた抜刷論文には必ず眼を通すようにしていた。

一九九三年、私は京都の龍谷大学に転勤することになった。京都では研究会、学会、シンポジウムがしばしば開催され、安田さんにお会いする機会も多くなった。そしていつの頃からか、安田さんの友人でもあり、私の内地留学のときに指導いただいた吉川忠夫先生や、先輩の東晋次さんなどとささやかに酒宴をもつことが恒例になっていた。夕方早くから深夜近くまで、安田さんと吉川先生の絶妙な会話に耳を傾け、ときどき東さんや私があれば口を挟む。世俗とは全く無縁の清談、それも「其の事を高尚にす」るような身構えもなく、居心地のよい時間が過ぎていった。安田さんの話題は、眼前に並んだ熱燗のお酒や肴の魚菜についての蘊蓄から、現在の中国史の研究状況に至るまでバラエティに富んでいたが、何度も話題に上ったのは自分は「政治」がおもしろいんだということと、正史などの史料をどう考えるのか、とりわけ『晋書』がいかにバイアスのかかった正史かということについてだった。

「いままでもないが、現行『晋書』は唐・劉知幾『史通』が「新晋書」「皇朝晋書」などというように、唐太宗の詔によっ

て南斉に編纂された臧榮緒『晋書』を底本にして再編されたものであり、残念なことにそれ以前に編纂された諸家の旧晋書はほぼ散佚してしまった。たとえバイアスがかかっていたとしてもその時代を知る手がかりはこの『晋書』しかない、それに『晋書』には独特の雰囲気があってもおもしろいところもある、などと私が具体的な根拠もないうまくコメントすると、安田さんはそれでも「あかんのや」という。安田さんの「あかんのや」には、その言葉が発せられるまでに長短の間があるが、『晋書』については一瞬の間もなかった。このような『晋書』に対する姿勢は、著書の『六朝政治史の研究』（京都大学学術出版会、二〇〇三年）という表題にも示されるように、研究の関心が何より「政治」にあったことと深く結びついていると思う。後にも触れることになるが、新晋書はやはり唐太宗の「政治」的な意向が投影されているに違いないからである。

安田さんがその政治史の研究をスタートさせた一九六〇年代の歴史学界では、現在からは想像し難いだろうが、史的唯物論がなお一世を風靡していた。大学でも学生運動という「政治」の嵐が吹き荒れ、それはまた学問の方法論とも絡み合って複雑な様相を呈していた。安田さんの「政治」への関

心や「政治史」の研究は、こうした風潮とは一線を画している。このことは、「ご自身が「あとがき」でも触れているように、当時の名古屋大学東洋史研究室の学風によるものが大きい。なかでも宇都宮清吉先生の「人間学としての東洋史学」という史観は、安田さんの研究にも深く刻み込まれている。「政治」を担った人々の内面性にまで深く降りたち、そこから逆に政治の展開を射照する、安田さんの政治史にはそうした視点が一貫していたように思われる。

それはまた、宇都宮先生がそうであったように、史料解説へのこだわりともなっている。「王僧虔『誡子書』攷」(著書第Ⅳ編・第十二章)などはそのこだわりを最もよく表明するものだが、こうした短い作品だけでなく、たとえば『晋書』もまた一つの作品として読み込み、透徹した分析を通じてこの時代に固有な歴史像を追究しているのではないだろうか。

このような安田さんの六朝政治史研究の全体については、すでに幾つかの紹介や書評があり、今後とも若い世代の研究者によって検証されていくだろう。ここでは、私自身の関心に引き付けて、安田さんの個々の研究について触れてみたい。

安田さんの研究の出発点は、南朝の政治史についてである。私が最初に読んだ論文は、「晋安王子勛の反乱について―南

朝門閥貴族体制と豪族土豪」(初出一九六七年、著書第Ⅱ編第六章)であったが、この論文で用いられた政治体制からの「疎外」、「門閥貴族」と「寒門」、「晚渡北人」、「新貴族主義」といった表現は、今でも鮮明に記憶に刻まれている。政治史を理解する上で、こうした方法があることにはじめて気づかされたといつてよい。

道教史研究においても、西晋末の永嘉の乱で大量に生じた華北からの流民がどのように江南の地に定着していったのかは大きな問題となる。しかし、定着の段階を示す僑州郡県、土断、黄白籍の実態の解明は難問であって、あれこれ論文を参照したものなかなか判然としない。安田さんの一連の僑州郡県の論文は、繰り返し読むことになった。

このように、印象深い論文はいろいろあるが、ある意味で私自身に関わりが深かったのは、「西晋武帝好色攷」(初出一九九八年、著書第Ⅰ編・第二章)である。二〇〇五年の晩秋、安田さんに龍谷大学での講演をお願いしたことがあった。講演の題目は「曹魏明帝の土功好みをめぐって」、「西晋武帝好色攷」の「むすび―史料論的補説」で言及している曹魏明帝の「宮室修治」の問題をさらに敷衍したものであった。講演の詳細は、その後、「曹魏明帝の『宮室修治』をめ

ぐつて」と題して論文として刊行されているのでそちらを参照していただきたい（『東方学』一一一、二〇〇六年）。結論的にいえば、「西晋武帝好色攷」と対をなすものである。

講演に先だつて連絡のあつた参考文献の中には、当然のことながら「西晋武帝好色攷」が掲げられていた。この論文題目を見て、準備に追われていた大学院生たちが一瞬どよめいた。学術論文の題目に「好色」という言葉があつたのに少し驚いたらしい。この言葉が想起させるイメージは、伝説的な夏桀、殷紂から現代の毛沢東に至るまで連続として纏わり付いてきた通俗的な物語であろう。さらに、魏晋南北朝史を学ぼうとする大学生が最初に読む「通史」である岡崎文夫『魏晋南北朝通史』、宮崎市定『大唐帝国』、谷川道雄『世界帝国の形成』などの名著や、唯一の伝記ともいふべき福原啓郎『西晋の武帝 司馬炎』は、いずれも呉の平定後、武帝が酒色にふけて政治を弛緩させたことに大なり小なり言及している。実際、現存『晋書』にはそのような記述があり、『資治通鑑』もそのような流れで叙述されている。大学院生が思い浮かべたのは、こうした皇帝の姿に違いない。講演の後、これも酒宴のことだつたと思うが、「好色」というタイトルに大学院生が少しばかり動揺していた、論文の主旨とは別の

イメージで受け取られるかも知れず、主旨に沿つた別のタイトルでもよかつたのではないかと話すと、安田さんは少し考え込んだ後で、「いや、やはり『好色』でないといかんのじゃ」と答えた。後になつて気付いたのだが、著書の「あとがき」には「内容に即したより典雅な標題をととも考えないではなかつたが、敢えてもとのままにした」とある。

この論文は、武帝の「好色」の表れとされてきた采女政策の意図が、実は暗愚な跡継ぎの皇太子を輔佐する多くの親弟を儲けて皇族封王制を強固なものとし、また采女の子女を介して氏族良家の家々と個別的に結びついて「外戚」としての支援を期待することにあつたことを論じたものである。つまり、武帝の「好色」には、この時代の皇帝がブルマス・インテル・パールス（同輩中の第一人者）に過ぎず、血縁や姻戚などの私的かつ直接的個別的な人的結合関係に依拠せざるを得ないという当時の歴史性が刻印されているというのである。さらに、「むすび―史料論的補説」では、呉という外圧が消失した後は、酒色に耽溺して政治を怠つたという武帝像が、『資治通鑑』をはじめ『十七史商榷』などに受け継がれていくが、その端緒は唐太宗が自らの政治を正当化するため、諸家の旧晋書を再編した新晋書、つまりは「唐太宗期現

代史」にあるという。安田さんが何度も話題にした『晋書』のバイアスとは、この『晋書』がそのままの晋代史ではなく、「唐太宗期現代史」であることから生じたズレということになる。

安田さんが「好色」という言葉に敢えてこだわったのは、いわばパターン化された歴史理解として唐太宗以降、司馬光、清朝考証学、近現代の中国の研究者、さらには今日の日本の研究者による通史に至るまで継承されてきた強固な通説に対峙するためだったのに違いない。こうした通説に対して、武帝の「好色」は「個人的性格や志向性」「心情の変化」などの一般的な人間性に即した次元の解釈にだけ還元できないこと、「何よりも当時の社会のあり方に密接に関連し、当期王朝権力の質と性格に直結するところの、著れて歴史的な事象であったこと」を明らかにしようとした。現存『晋書』が唐太宗期の現代史として新修されたものであるにせよ、西晋武帝による采女政策の意図の痕跡をすべて消し去ることはできなかったことになる。安田さんは、ほとんど唯一の史料ともいうべきこの新晋書を隅々まで精査して、従来の通説とは別の武帝像を描きだしたのである。

ところで、先にも触れたが、安田さんの『晋書』批判に對

してしばしば『晋書』はおもしろいところもあると口を挟んだものの、その理由をきちんと説明できないまま日々が過ぎ去り、安田さんは不意に逝ってしまった。追悼の文中で私論を述べることには躊躇いもあるが、なぜ『晋書』がおもしろいかを少しだけ述べて、安田さんに手向けたい。

私にとつての『晋書』のおもしろさというのは、生前と死後の世界、地上と異界の空間が同じ次元で「歴史」として語られていることである。新晋書の編纂にあたって、太宗は自ら武帝紀にきわめて批判的な史論を展開したが、また王羲之の書の熱心な収集家でもあって、王羲之伝にその書を論じた論贊を著わしている。この王羲之伝には、道教徒だった王羲之と交游があり、当時の新しい道教の先駆者であった道士・許邁の伝記が附され、許邁が山中にみいだした「洞天」とよぶ仙界の描写が記述されている。つまり、仙界という後代では「歴史」から排除されたはずの空間が王羲之の優游とした生涯と並行して、「歴史」として叙述されているのである。このような史書のあり方は、『晋書』に限らず、南北朝時代の一連の正史、そしておそらく『旧唐書』にもみいだすことができるのではないだろうか。

唐太宗による新晋書編纂の目的の一つは、底本とした蔵榮

緒『晋書』の「煩而寡要」な記述を簡潔なものにすることに
あつたという。しかし、劉知幾は『史通』採撰篇で、晋の
「雜書」である『語林』『世說』『幽明錄』『搜神記』などの
「諧謔小弁」「神鬼怪物」ともいふべき「非聖」「乱神」の書
物を改めて採録し、より多くより博く収集することをよしと
して小人を悦ばせたものの君子の嘲笑をかつたという。こう
した現存『晋書』への批判は清朝考証学にもみられ、たとえ
ば『廿二史劄記』卷八「晋書所記怪異」には「異聞を採りて
史伝に入るるは、惟れ晋書及び南北史最も多し」とある。し
かし、興味深いことに呂思勉『讀史札記』『論晋書七』は、
次のように論じている。「唐修晋書」が多くの「雜説」を取
録したことは、「晋書病」として批判されてきたが、実は当
時の史家の「風氣」によるもので、唐修晋書の編者だけに限
らない。ただ多くの雜説を採録したことで「荒怪」に流れ、
最大の「病」として非難されることになった。しかし、この
時代には「荒怪」を述べた書物も信じた人々も多く、そこに
「当時の風氣」をみいだすことができ、「無鬼論」の立場から
そのすべてを削除できるはずもない、と。その例として『晋
書』卷九一芸術伝に所収された鳩摩羅什の伝記を挙げる。新
修晋書の編者は仏典にも通じており、旧晋書の鳩摩羅什伝を

一読して当時の仏教徒が実は全くその教義には関わりのない
ことを理解したのであつて、それなのにそれを改めたり削つ
たりするはずがないという。周知のように、『晋書』では鳩
摩羅什は摩訶不思議な方術者として描かれているが、逆にこ
の時代の「風氣」を彷彿とさせるものであり、新晋書の編者
もそれを歴史の記録として残したというのであろう。この
「風氣」、いわば時代の雰囲気は、東晋後半に江南で展開され
た新しい道教運動の土壌でもあつた。こうした風氣こそ、こ
の時代を生きた人々にとつての歴史のリアリテイではなかつ
たのだろうか。「風氣」にせよ、「好色」という歴史物語にせ
よ、安田さんの言葉を借りるならば「何よりも当時の社会の
あり方に密接に関連し」、あるいはまた「当時期王朝権力の
質と性格に直結する」ところの、すぐれて「歴史的な事象」
であり、そのことを読み解いていくことが必要なのではない
だろうか。

不十分な見通しに過ぎないが、こんな風に『晋書』の話を
してみたかった。「あかんのや」とも、「ふむ、そうか」とも
言われそうな気がする。もう一つ付け加えるなら、「宗教は
わかんのじゃ」と言われそうな気もする。ただ、安田さん
には、後輩のかなりあやふやな話でもひとまずは呑み込ん

で、おもむろに「ここがあかんのではないか」と諄々と論じてくれる懐深さがあった。

東北大学を退官後、安田さんは校点本「二十四史」を論文を書くといった意図とは関わりなしに虚心坦懐に読むことを日課にしていると語っていた。正史を一つの作品として丸ごと読もうとされていたのであろう。『史記』から始めておそらく『旧唐書』『新唐書』までは読了されていたようである。「おもしろいんじゃない」というのが口癖だった。『晋書』についてもそうだが、まだまだ聞きたいことがたくさんあった。たとえば梁代以降の「新貴族主義」の行方である。「この課題だけには、工夫を凝らして厳しい史料上の壁を克服して一文を草し、その上で旅立ちのときを迎えねばと、固く心に期し、かつは念じている次第である」というのが著書の結びの言葉である。謹んで合掌したい。

(つづき あきこ 龍谷大学名誉教授)

